本学での44年間の女子体育史研究を振り返って

Review of My 44-year Study on the History of Women's Physical Education at TWCPE

キーワード：女子スポーツ，女子体育教師，ジェンダー
Keywords: Women's sport, women's physical education teacher, gender

掛水　通子

KAKEMIZU Michiko

はじめに

私は本年度末を以て，本学を定年退職する．もちろん，研究はこれからも継続されるが，本学における44年間にわたる女子体育史研究を，与えられた時間のなかで振り返る．

1．女子体育史研究の契機

私が学んだ広島県の高校は，旧制中学が戦後共学になった高校で，女性教諭は保健体育科，家庭科と養護教諭のみであった．女子生徒の保健体育の授業数は男子生徒より2時間少なく，女子生徒が家庭科の授業の間，男子生徒は体育の授業を受けていた．このようなジェンダー格差に当時は疑問を持っていなかった．

高校の保健体育科教師を目指して，1969（昭和44）年4月に東京学芸大学教育学部特別教科教員養成課程（高校教員養成）保健体育科に入学した．大学入学後，音楽大学へ進んだ親友と母校の埼玉県の中学校へ挨拶に行き，保健体育科に入学したことを恩師に報告したところ，恩師から「体育は趣味ではなかったのか」と言われた．親友には「音楽は趣味ではなかったのか」と言われなかった．言外には「一生懸命勉強していたのになぜ体育なのか」ということが感じられた．当時はギリシャの理想のカロカガティア（身体的にも精神的にも善美）という言葉を知らなかったが，中学高校ではバレーボール部に所属し，勉強と運動を両立させていた．大学入学後次第に，体育教師は教師のなかでもどこか差別されているのではないかという疑問を感じるようになった．

大学では，女子学生も剣道やサッカーの授業を受け，男子学生にもダンス授業があったが，女子学生のダンスの授業時間は異様に多く，女子学生だけ水着のような「レオタード」で授業を受けた．このようなジェンダー格差に疑問を感じるようになった．

こうした女子体育，体育教師，女子体育教師に対する疑問を解決するために，卒業論文で女子体育史研究を開始した．

1973（昭和48）年4月に東京教育大学大学院修士課程体育学研究科体育学専攻体育史専修（筑波大学の前身）に進んだ．現在では，体育学関連の大学ほぼ全大学に大学院が設置されているが，当時は大学院の設置は希だった．1973（昭和48）年4月に他研究科での体育関係専攻も含めて，博士課程を設置していたのは東京大学教育学研究科体育学専攻など5大学院，修士課程では東京教育大学体育学研究科，東京学芸大学教育学研究科学校教育専攻など6大学院のみだった．

なかには，東京大学や東京教育大学の教育学研究科博士課程に進んだ方や，一年おいて，1976（昭51）年4月に新設された筑波大学大学院体育科学研

究科博士課程に進んだ同期生もあったが，大多数は修士課程修了とともに大学などに職を得ていた．

2．本学における44年間の女子体育史研究

1）本学着任の理由と本学に関する研究

1975（昭和50）年3月に大学院を修了し，本学に助手として着任した．地方の国立大学にという話しもあったが女子体育史を研究するために，本学を選んだ．藤村トヨのこと，本学はわが国で最古の女子体操学校であることは理解していた．着任してみると，本学に関することでも，解明されていないことが多かった．

着任後，まず，本学の実際の創設者高橋忠次郎に関する新史料を，宮城県の忠次郎の故郷で発掘し，本学紀要に執筆後，共著の単行本『近代日本女性体育史―女性体育のパイオニアたち―』のなかに収めた．

学園史編集には3回関わることができ，『藤村学園八十年のあゆみ』（1983），『藤村学園100年のあゆみ』（2002），『藤村学園創立110周年記念　東京女子体育大学・東京女子体育短期大学この10年のあゆみ　2002－2012』（2012）に研究の成果を収めることができた．また，本学に関する研究をいくつかしたが，阿江と雨ヶ崎との共同研究「本学競技者に関する研究」は途中から科研費も得て，本学紀要31号から34号までに共著で7編掲載し，『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学名選手名鑑（1954年-1995年主要国際競技大会出場者）』（1997）を残すことができた．このような研究は個人情報保護が言われる今ではできない．

2）科学研究費補助金採択と本学紀要等掲載論文

表1に科学研究費補助金採択と論文，著書・編著を示した．常に，自分の研究方法で良いのかどうか悩みながらの研究であった．しかし，女子体育大学での女子体育史研究は希少で，論文を書き続けてきたためか，文部省または学術振興会の難関（採択率25％程度）である科学研究費補助金に採択され続けた．研究代表者として11回23年間採択され，さらに昨年度は博士学位論文に加筆した『日本における女子体育教師史研究』が研究成果公開促進費（学術図書）に採択された．また，学会賞も2つ（東京体育学賞：日本スポーツとジェンダー学会論文賞）受賞した．

今振り返ると，このような研究方法で良かったのだと思っている．私の研究は難解ではなく，年代順に並べ，年表を作りながら考え，「史料」を重視し史料に語らせ，史料を分析する方法を取っている．体育史研究は史料を探せないと論文を書けないが，史料に出会えた幸運もあった．

様々なテーマで研究した成果は，女子体育史は東京女子体育大学紀要に残しておくべきという信条から，主として本学紀要に執筆した．ファーストオーサーとして36編（単著33編，共著筆頭3編）共著5編の計41編を残せた．助手の初期，長女と長男出産の年は執筆できす，2007（平成19）年4月から5年間，学長の許可を受け大学の全ての仕事をしながら，研究日や夏休みなどを使って極秘に大学院博士後期課程に在学していた間の紀要執筆は1編のみだった．博士学位論文提出条件に，日本学術会議協力学術研究団体の学術雑誌に掲載された原著論文が必要なためである．「体育学研究」と「スポーツとジェンダー研究」に原著論文として掲載された．その他の学会誌掲載論文は少数である．本学女子体育研究所所報や他の雑誌に掲載した論文もあるが省く．

56歳での博士後期課程入学は，真の教授になるため，本学大学院設置の際に役立とうというためであった．大学設置基準第十四条に，「教授になることができる者は，次の各号のいずれかに該当し，かつ，大学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者とする」とあり，六まである号の最初の一に「博士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む）を有し研究上の業績を有する者」とある．私は1994（平成6）年4月に43歳で既に教授に昇任していたが，本学の甘い資格審査によるものだった．一般社会では，教授は博士の学位を持っていると思われており，時代と体育という学問分野のせいではあるが，博士の学位なしで教授と言われることに後ろめたさを感じていた．退職する今，本学に大学院設置計画は立っておらず，私の博士の学位は役立たなかった．

表1　科学研究費補助金採択と論文，著書・編著

年数	職位	年数	年度 西暦	年度 和暦	備考	科学研究費補助金採択		本学紀要論文名省略 号数	本学紀要論文名省略 単著・*共著*	学会誌 論文名省略	著書・編著 ◎単著　○共著（少数）△共著（多数）　□本学関係	
1	助手	1	1975	昭50								
2		2	1976	51								
3		3	1977	52	長女出産							
4		4	1978	53				14	単著			
5	講師	1	1979	54	長男出産	奨励(A)						
6		2	1980	55		奨励(A)		16	単著			
7		3	1981	56		奨励(A)		17	単著		○	近代日本女性体育史-女性体育のパイオニアたち-（共著：担当、高橋忠次郎）日本体育社
8		4	1982	57		奨励(A)		18	単著・*共著*			
9		5	1983	58				19	単著		△	体育史講義（共著：担当、女子体育の創始者たち）大修館書店
											□	藤村学園八十年のあゆみ（共著：担当、草創期）学校法人藤村学園
10		6	1984	59				20	単著			
11	助教授	1	1985	60				21	単著			
12		2	1986	61				22	単著		△	新版近代体育スポーツ年表（共著）大修館書店
13		3	1987	62				23	単著			
14		4	1988	63				24	単著		△	スポーツと教育の歴史（共著：担当、日本の女性のスポーツと教育）不昧堂出版
15		5	1989	平元				25	単著			
16		6	1990	2				26	単著			
17		7	1991	3		一般(C)		27	単著			
18		8	1992	4				28	単著			
19		9	1993	5				29	単著			
20	教授	1	1994	6		一般(C)		30	単著		○	女子体育の研究(女子体育基本文献集、解説書)（共著：担当、全22巻32冊中13冊）大空社
21		2	1995	7				31	*共著筆頭・共著*		△	スポーツ史講義（共著：担当、日本の女性スポーツと藤村トヨ）大修館書店
22		3	1996	8		基盤(C)		32	*共著筆頭・共著*			
23		4	1997	9			基盤(C)分担者	33	単著・*共著*		□	東京女子体育大学・東京女子体育短期大学名選手名鑑(1954年-1995年主要国際競技大会出場者)（共著・筆頭）東京女子体育大学
24		5	1998	10		基盤(C)		34	*共著筆頭・共著*			
25		6	1999	11				35	単著		◎	近代日本女子体育・スポーツ文献目録1876-1996（単著）大空社
											△	近代体育スポーツ年表(三訂版)1800→1997（共著）大修館書店
26		7	2000	12				36	単著			
27		8	2001	13				37	単著		○	近代スポーツの超克-ニュースポーツ・身体・気-（共著：担当、大和撫子のポーツ参加-日本における女性とスポーツの出会い-）叢文社
28		9	2002	14				38	単著		□	藤村学園100年のあゆみ（共著）学校法人藤村学園
29		10	2003	15		基盤(C)		39	単著			
30		11	2004	16				40	単著		△	Local Identity and Sport Historical Study of Integration and Differentiation（共著，担当 A Study of Trends in the Development of Women's Physical Education and Sport in Modern Japan: Based on a Review of the Publication of Books on Women's Physical Education and Sport from 1876 to 1996 ACADEMIA VERLAG(JSHPES-Studies Vol.11)）
31		12	2005	17				41	単著	スポーツとジェンダー研究	○	ブルマーの社会史-女子体育へのまなざし-（共著：担当、第4章ブルマーの戦後史-ちょうちんブルマーからぴったりブルマーへ-）青弓社
32		13	2006	18				42	単著	体育史研究	○	多様な身体への目覚め-身体訓練の歴史に学ぶ-（共著：担当、日本における女子体育教師数と役割の変遷）アイオーエム
33		14	2007	19	大学院博士後期課程在学							
34		15	2008	20								
35		16	2009	21				45	単著			
36		17	2010	22		基盤(C)				スポーツとジェンダー研究		
37	教授・図書館長	18	2011	23						体育学研究・博士学位論文提出	○ ○	体育・スポーツ科学概論（担当 第8章3. 体育教師養成史）大修館書店 体育・スポーツの近現代-歴史からの問いかけ-（担当 第Ⅱ章4. 「女子体育は女子指導者の手で」の出現-大正初期まで-）不昧堂出版
38		19	2012	24				48	単著		□	藤村学園創立110周年記念東京女子体育大学・東京女子体育短期大学この10年のあゆみ2002－2012 学校法人藤村学園
39		20	2013	25				49	単著			
40		21	2014	26				50	単著	スポーツとジェンダー研究・東京体育学研究		
41	教授・女子体育研究所所長	22	2015	27				51	単著	スポーツとジェンダー研究		
42		23	2016	28		基盤(C)		52	単著		△	データでみるスポーツとジェンダー（共著：担当 編集）八千代出版
43		24	2017	29			研究成果公開促進費学術図書	53	単著	スポーツ史研究	◎	日本における女子体育教師史研究（単著）大空社出版
44		25	2018	30				54	単著		△	よくわかるスポーツとジェンダー（共著：担当、女子体育教員の登場，スポーツウエアの変遷）ミネルヴァ書房
											○	身体文化論へのかけ橋-体育・女子・歴史研究の発展を求めて-（仮）（共著：担当、ジェンダーの視点から見た戦前における女子体育教師の確立過程：女子高等師範学校国語体操専修科卒業生の職歴から）叢文社（印刷中）

代表12　分担1　単著33　共著筆頭3　計36　共著5　計41

◎単著2　○8△8共著16　□本学関係4

3）著書・編著

単著2,共著16,本学関係書4合計22書を著した（表1参照）．印象深いベスト5（図1）は，単著の『日本における女子体育教師史研究』，『近代日本女子体育・スポーツ文献目録1876-1996』，共著の『近代日本女性体育史―女性体育のパイオニアたち―』，『ブルマーの社会史―女子体育へのまなざし―』，『女子体育の研究（女子体育基本文献集，解説書）』である．『ブルマーの社会史―女子体育へのまなざし―』には，当時の学生の母親193人にもブルマーの思い出を書いていただき，掲載することができた．この部分は後継研究者も引用しているが，今では実現しにくい研究である．

4）学会活動と国際会議・学会出席

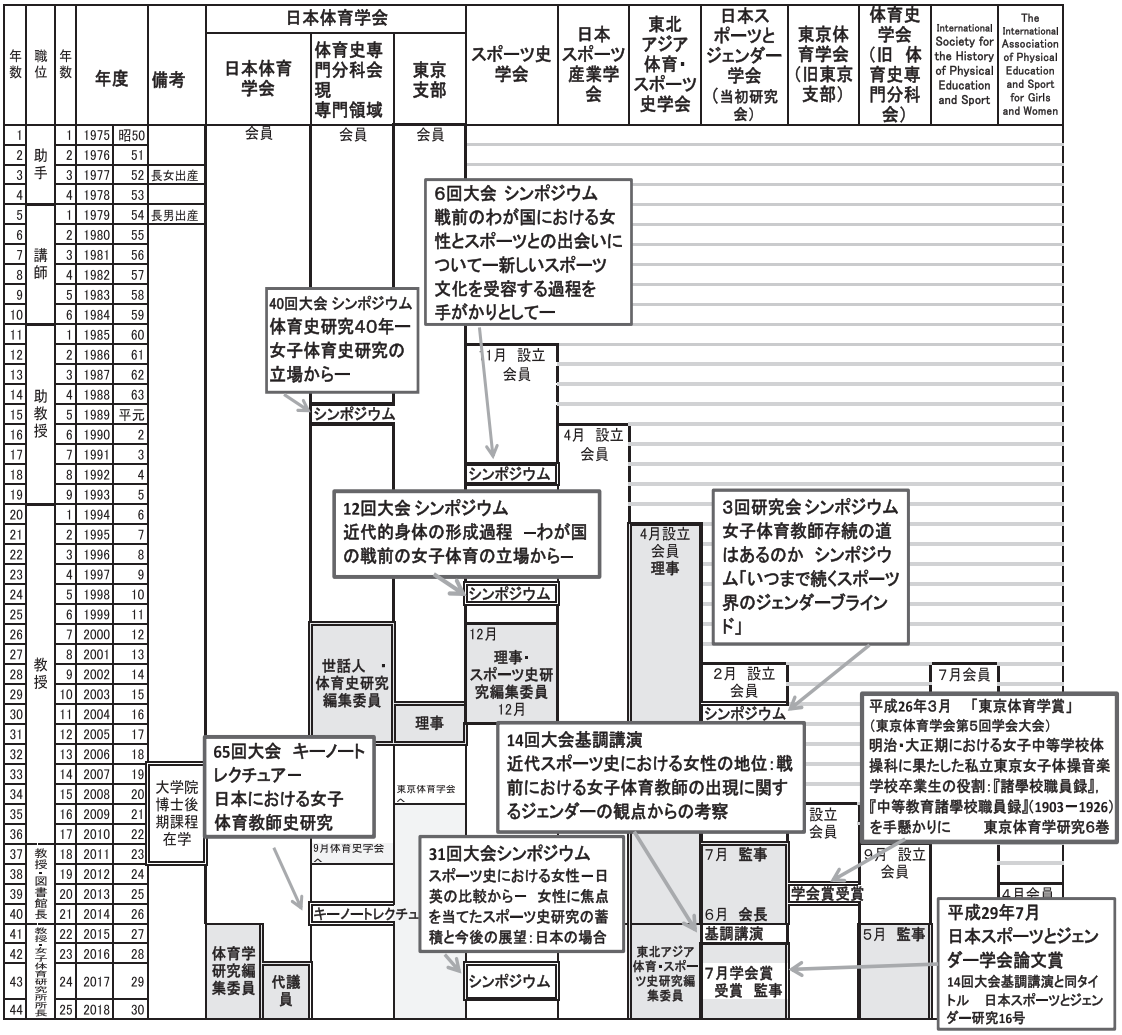
①学会活動

表2で，学会所属や役員歴，シンポジウムなどの登壇，学会賞受賞などを振り返ってみた．着任当初は日本体育学会のみに所属し，そのなかの体育史専門分科会での活動が中心だった．その後，多くの学会が分化独立し，多くの学会に所属することになった．今では，日本体育学会を含んだ45の独立学会が日本スポーツ体育健康科学学術連合に統括されている．体育史関係学会へ重複して所属することになり，年に何回も学会に参加し，勉強することになった．学会で多くの研究者の発表を聞いて影響を受け，また，学内では関心を持ってもらえなかった私の研究も，学会発表や著書を通して関心を持ってもらえ，いくつかの研究は引き継いでもらえている．何よりも，大学では体育史研究室所属は一人だが，多くの研究者と交流できたことが糧になっている．日本体育学会，スポーツ史学会，日本スポーツとジェンダー学会のシンポジウムや基調講演，キーノートレクチャーに登壇する機会も多く与えられた．表2にそれらの題目を示した．

学会は誰かが運営しなければ，学術雑誌も出せず，学会大会も開けない．私は同時期にいくつかの学会の理事や学会誌編集委員を掛け持ちし，学会大会準備，理事会，学会誌編集委員などの仕事をしてきた．スポーツにおける男女平等を目指している日本スポーツとジェンダー学会では会長を引き受け，本学でも学会を開催できた．定年間際の現在も，日本体育学会代議員，同体育学研究編集委員，東北アジア体育・スポーツ史学会理事，同学会誌編集委員，体育史学会監事，日本スポーツとジェンダー学会監事の仕事で多忙であるが，順次任期を終えていく．

図1　印象深いベスト5のうち、4冊

表2　学会活動　シンポジウムなどの登壇と役員



②国際会議・学会出席

研究そのものが楽しかったが，より一層楽しかったのが，国際会議や学会への出席や発表である（表3）．振り返ってみると，最初の出席は1987（昭和62）年7月1日から16日にギリシャ・オリンピアで開催された国際オリンピックアカデミー（IOA）第27次セッション（ユースセッション）への出席で，前後を入れると3週間近くを要した．このIOAはオリンピア遺跡に隣接したIOAオリンピック学院で毎年開催され，ユースセッションは各国OAから35歳以下の2，3人が派遣される．長女10歳，長男8歳を置いて海外へ行くのは心配であったが，家族の勧めもありJOA（日本オリンピックアカデミー）に入会し応募した．年齢は1歳超えていたが，JOA選考で許してもらえた．2週間の講義や遺跡見学は研究と同時に，体育史，スポーツ史の講義に大いに役立った．

次の国際会議・学会出席は子どもたちが大学生になってからで，以後ほぼ毎年，時には年2回出席した．日本開催の7回を除いて9ヶ国14都市での開催で，全23回を数える．昨年5月のボツワナ共和国ハボロネ市の会議は，最も遠方での開催だった．

海外での国際会議・学会への出席は自らの研究を世界に発信すると同時に，世界の体育や体育史研究・女性スポーツの動向を知ることができる良い機会であった．また，世界の歴史，文化，自然に触れることができ,楽しい思い出となった.学生へは講義のなかで，世界の動向を伝えるようにしてきた．また，英語での発表のため，1986（昭和61）年から33年間週1時間ネイティブスピーカー英語教師を学内に招いての教員英会話研究会は楽しいひと時であった．

表3　国際会議・学会出席

年数	職位	年数	年度		備考	国際会議・学会	
						国・都市	学会名
13	助教授	3	1987	62		ギリシャ・オリンピア村	国際オリンピックアカデミー第27次セッション
14		4	1988	63			
15		5	1989	平元			
16		6	1990	2			
17		7	1991	3			
18		8	1992	4			
19		9	1993	5			
20	教授	1	1994	6		日本・高知市	東北アジア体育・スポーツ史セミナー
21		2	1995	7			
22		3	1996	8			
23		4	1997	9		日本・福岡市	東北アジア体育・スポーツ史学会第2回大会
24		5	1998	10			
25		6	1999	11		オーストラリア・シドニー市 韓国・ソウル特別市	Fifth IOC World Congresson Sports Sciences 東北アジア体育・スポーツ史学会第3回大会
26		7	2000	12			
27		8	2001	13			
28		9	2002	14		日本・金沢市	The 6th Seminor of the International Society for the history of physical education and sport
29		10	2003	15		中華民国・嘉義市	東北アジア体育・スポーツ史学会第5回大会
30		11	2004	16		ギリシャ・テッサロニキ市	The Pre-Olympic Congress 2004
31		12	2005	17		日本・つくば市	東北アジア体育・スポーツ史学会第6回大会
32		13	2006	18		日本・熊本市	2006 World Conference on Women and Sport in Kumamoto (4th IWG Conference)
33		14	2007	19	大学院博士後期課程在学	韓国・太田市	東北アジア体育・スポーツ史学会第7回大会
34		15	2008	20		フィンランド・ヘルシンキ市 日本・鹿屋市	FIEP(Fédération Internationale d´Education Physique) World Congress 2008）50th ICHIPER・SD Anniversary World Congress 2008
35		16	2009	21		中国・大連市	東北アジア体育・スポーツ史学会第8回大会
36		17	2010	22		オーストラリア・シドニー市	5th IWG WORLD CONFERENCE ON WOMEN AND SPORT SYDNEY 2010
37	教授	18	2011	23		中華民国・台南市	東北アジア体育・スポーツ史学会第9回大会
38		19	2012	24			
39	教授・図書館長	20	2013	25		キューバ・ハバナ市 日本・札幌市	The 17th World Congress for The International Association of Physical Education and Sport for Girls and Women 東北アジア体育・スポーツ史学会第10回記念大会
40		21	2014	26		フィンランド・ヘルシンキ市	6th IWG WORLD CONFERENCE ON WOMEN AND SPORT
41	教授・女子体育研究所所長	22	2015	27		韓国・釜山広域市	東北アジア体育・スポーツ史学会第11回大会
42		23	2016	28			
43		24	2017	29		アメリカ合衆国・マイアミ市 中国・金華市	The 18th World Congress for The International Association of Physical Education and Sport for Girls and Women 東北アジア体育・スポーツ史学会第12回大会
44		25	2018	30		ボツワナ共和国・ハボロネ市	7th IWG World Conference on Women and Sport

23回　日本7回
海外9カ国14村市2都市2回

おわりに

本日は短時間のため，研究の具体的内容には触れることができなかった．女子体育教師史に関して簡単に述べると，美しい，弱い，お淑やか，出産などの女子の特性のために女子体育が出現し，それを教えるのは女子教員がよいとされ，女子教員もそのことを長い間よしとした．中等学校女子教員養成をする女子高等師範学校に体育科ができるのは1937（昭和12）年で，代わりに第六臨時教員養成所が教員養成をしたが，他の学科に比べて，体操家事科だけが入学年齢が低く，修学期間も短かった．その基準で私立体操学校の無試験検定出願が許可され，女子の体操科教員のみが他教科と比べて基準が低くなった．戦前の女子体育教師は私学出身者が多く，女子体育教師は教師から差異化された．結婚が職業継続を困難にし，短期間での退職が多いため，若い教員が多かったが，給料が安いことは学校にとって好都合だった．その循環で地位の向上がされにくかった．

私の在職初期は，育児休暇はなく産前産後6週間の産休だけだった．育児家事を平等に担った同業の夫，保育園に入る前も後も，長女長男の育児を手助けしてくれた実家の両親と当時は大学生だった妹，保育園，学童保育，働きやすかった本学の環境と教員仲間など，全てに恵まれて職業継続をすることができたことに感謝する．

小学校のころから希望していた職業に就き，無事定年退職を迎えることが出来た．女性の地位向上の一翼を担え，社会に貢献できていたら嬉しく思う．

本学は女性教員の比率が他大学に比べて高い．我々が働く姿は，学生のみなさんの人生に役立つものになると信じている．